

国境を越えて老司祭と分かち合った尹東柱の物語¹

釜信眞

1. 2019年5月、思いがけない出会い

計画していなかったのに、いつの間にかどこかで始まり、まるで車輪をつけたように転がり続けることがある。井田泉司祭との出会いがそうだった。2019年5月、日本訪問を計画する際、井田司祭との出会いは当初の予定にはなかった。「尹東柱を記憶する人々に何年も前から会っています。いつか本にする予定です」と訪問の目的を話すと、「井田泉司祭にぜひ会ってみてください」と積極的に提案してくれたのは京都の李元重^{イ・ウォンジュン}牧師だった。志ある人たちの協力で井田司祭に連絡が取れ、幸いにも出国前にインタビューの時間を決め、質問内容をまとめて送ることができた。5月21日正午頃、大阪・関西国際空港に到着したとき、井田司祭からのメールも届いたばかりだった。

「準備する時間があまりないでしょうが、できるだけ有意義な時間を持ちたいと思います。それで、もしよろしければ、私のプロフィールや尹東柱について書いた文を私のホームページやブログで見ただけであれば幸いです。」

宿題をいただいた！ 尹東柱に関する対話を分かち合いながら豊かな時間を過ごしたいという願い、そして準備のための細心の配慮まで、幾重もの心遣いが感じられた。心が忙しくなった。準備する時間は一日しかなかった。インタビューは2日後だったが、翌日22

¹ この記事は2019年5月23日、日本の奈良県にある奈良基督教会で行われた聖公会司祭井田泉氏とのインタビュー、彼が提供した資料、そして2023年1月10日から31日までやり取りしたEメールの内容を基に作成された。以後、韓国の雑誌『白潮』第12号（2023春）、露雀洪思容文学館、2023.3.20に掲載した後、若干修正した文をここに再収録する。この文で特に出典を明記せずに引用符で示した引用は、彼から送られたEメールと2019年5月23日のインタビュー内容からのものである。貴重なインタビューの機会と資料を提供し、この文の掲載を許可してくださった井田泉司祭に感謝を申し上げる。

日は別の予定があった。関西空港で簡単に昼食を済ませた後、急行で京都に移動した。ホテルに到着し、急いで旅装を解き、小さな机に座ってノートパソコンを立ち上げ、司祭のホームページとブログ、フェイスブックを順番に見た。彼が聖職者として記録した教会の日常、聖書、日韓のキリスト教史、そして自ら翻訳した尹東柱^{ユンドンジュ}、金素月^{キムソウォル}の詩に至るまで、膨大な資料が次々に整理されていた。どれだけ見ることができるだろうか。早朝に家を出て、バス、飛行機、急行列車に乗り換え、長い距離を移動したため、疲れが溜まってくる時間だった。コーヒーを飲みながら、しっかりと集中して、じっくりと資料を読み始めた。

井田 泉。1950 年生まれ。大阪外国語大学朝鮮語学科卒業、同志社大学大学院神学研究科歴史神学専攻。聖公会神学院卒業。1979 年日本聖公会司祭按手、聖公会神学院専任教員、日本聖公会日韓協働委員、聖公会平和ネットワーク共同代表、奈良基督教会牧師、親愛幼稚園園長。

『日韓キリスト教関係史資料 II』共編、「安重根とキリスト教」、「神社参拝問題と朱基徹の説教」などの論文発表。尹東柱の詩の翻訳と説教・講演。

主な内容だけを簡単に抜粋した彼の経歴事項である。夕食をとるのも忘れてずっと席に座って資料探索の旅をしながら、私が受けた彼の印象はこのようにまとめることができるだろう。

聖職者、韓国への関心。単に「関心」という言葉で要約するには、韓国語、韓国のキリスト教、韓国の詩に対する彼の情熱と取り組みは長くて深い。熱心なキリスト教史学者、休みなく読んで記録する人、若くて活力がある。満 69 歳の年でもインターネットと SNS を活用し、交流を広げる人。

2 日後に予定されている彼との出会いがとても楽しみだった。井田泉司祭。韓国とは異なり、日本では聖公会の司祭を「牧師」という呼び名で呼ぶが、私にとっては「神父（シンプ）」という呼び名の方が自然に感じられた。写真で見た彼の印象は、とても落ち着いていて、鋭く繊細な感じだった。日本人である彼が韓国語を専攻し、韓国について深く研究するようになったきっかけは何だろうか。尹東柱の詩の日本語訳がすでにいくつもある

のに、なぜ自ら詩を翻訳するのだろうか。次々と疑問が浮かんできた。資料を読んでいて疑問が浮かぶと他の資料を探し、そうして巡るうちに、いつの間にか時間が経った。外は暗闇が濃く広がっていた。近くの小さな食堂で遅い夕食に温かいそば一杯に日本酒を添えて、遅くまで彼についての想像と質問を続けた。

2. 隣家の朝鮮人家族と韓国（語）愛

2019年5月23日。快晴の日だった。5月末の京都は暑かった。朝から暑気が感じられた。通訳を手伝ってくれることになったキム・スミンさんと奈良駅で待ち合わせして、教会まで一緒に歩いた。² 井田司祭の案内で、1930年に建築された礼拝堂の建物と教会境内を巡り、信徒たち、幼稚園の子どもたちと挨拶を交わし、司祭館の応接室に入ると、テーブルにはあらかじめ用意された資料が置かれていた。彼の略歴、尹東柱の詩の翻訳本、奈良基督教会礼拝堂の紹介資料、説教文などが整然と置かれていた。

告白すると、機械があまり好きではない私は、その日のインタビュー内容を録音もしなかったし、井田司祭との写真1枚も残せなかった。私が写真を撮ったり撮られたりすることをあまり好まないうえに、予定した時間をずっとオーバーして、彼の次の予定まで邪魔をするほどインタビューが長くなり、その間対話に完全に没頭していたからだ。写真1枚も録音ファイルも残せなかったけれども、その日の静かな、しかし時によっては毅然とした彼の声、対話の内容、蒸し暑い天気、時折部屋の中に入ってくる涼しい風、なんだか暖かい空気。その時の跡が私の心に残っている。

井田司祭が覚えている韓国との最初の縁は「隣の家朝鮮人家族」だ。彼は1950年1月、滋賀県大津市で生まれた。近江八幡市に住んでいた子ども時代、隣に朝鮮人家族が住んでいた。その家に少年・泉より1歳年下の「朝鮮の子」がいた。学校から帰ると、朝鮮人の子どもを含め、近所の子どもたちが皆で路地に集まって遊んでいた。ある日、いつものように子どもたちが一緒に遊んでいたのだが、歌を歌い始めた。誰が主導したわけでも

² 井田司祭はその日、日本語と韓国語を併用してインタビューに応じた。主に日本語で話をした後、重要な部分は正確な韓国語で伝え直した。

なく、自然に起きたことだった。歌はこんな歌詞だった。「朝鮮の山奥にかすかに聞こえた豚の声、ブーブー、ブーブーブー。」その時だった。突然隣家の窓が開き、「朝鮮の子」の母親が大声でその息子を叱りつけた。あっという間の出来事だった。子どもの頃の一場面を思い出しながら、井田司祭は言った。

「何か悪いことをしたと思った。それが最初の記憶です。」

振り返れば、歌の歌詞に朝鮮人を卑しめる意味があるとか、歌を歌った子どもたちに特別な差別意識があったわけではなかった。しかし当時、日本社会には朝鮮（人）に対する偏見と差別意識が蔓延しており、朝鮮人の母親は、近所の子どもたちが歌う歌に侮辱を感じたのだろう。小学生だった少年・泉が歴史的状況や社会的雰囲気について詳しく知ることはできなかったが、敏感な彼は「私たちが何か悪いことをしたのだ」、「言うてはいけないことを言ってしまった」と直感した。少年・泉が韓国と韓国人に対して関心を持つようになった最初の出来事だった。

彼を韓国文化の世界に一步近づけたのはラジオだった。中学生の頃、誕生日のプレゼントにラジオをもらった。日本向けの日本語放送の様々なチャンネル、中国の北京放送、ロンドン BBC、アメリカ VOA、韓国 KBS などをあちこち回しながらラジオの世界を探求した。その中でも韓国の KBS 国際放送が良かった。文化を紹介するのが興味深かった。最初は歌が好きだった。韓国の歌曲や民謡が美しかった。毎日聞いた。「韓国が好きになりました。」 KBS チャンネルからは、一定の時間に日本語放送が終わると韓国語放送が続いた。中学生の泉はその時間を待っていた。韓国のアナウンサーの話し声に夢中になった。ラジオを聴くことは、韓国の文化、歌、言葉に興味を持つ決定的なきっかけとなった。韓国放送をよく聞いていた中学時代を思い出すように、歌曲「カゴパ」の1節「私の故郷は南の海」を歌いながら、老年の司祭はこう言った。

「韓国の全体、すべてを愛するようになりました。」

単なる好奇心やただの趣味にとどまらなかった。愛する対象をもっと知りたいと思ったし、次第に愛には責任が伴うという事実も知るようになった。なぜ隣家の朝鮮人家族が故郷を離れて日本で暮らすことになったのか。朝鮮人の母親はその時なぜあんなに怒ったのか。それをもう少しはっきりと歴史的な文脈で理解することができるようになった。「少しずつ歴史的な事実を知るようになりました。日本が韓国から文化的に多くの恩恵を受けたのに、日本が韓国に返したのは罪であり悪である。日本人として責任を感じるようになりました。力がなくても何かしなければならぬと思うようになりました。」

愛、そして責任。この2つの言葉が、その日のインタビューで私に最も印象深く残った言葉である。韓国（語）への愛、神への愛、そして尹東柱への愛。彼は何度も「愛」を語り、力をこめて「責任」を語った。日本人として感じる責任、日本の戦争責任、そして尹東柱の死に対する責任。愛を語る時、彼は恥ずかしがりの青年のように優しい笑顔を見せ、責任を問う時は老練な闘士のように躊躇なく断固としていた。

大学受験を控えた高校生の泉は、韓国への愛を自分の人生にどうつなげられるか悩んだ。家計が豊かでなく、どうしても国立大学に行かなければならなかった。当時、日本の国立大学入試は前期と後期、2回の受験機会があった。彼は法律の専門家になって在日朝鮮人の人権を守る仕事をしたいと考え、京都大学法学部に志願したが不合格。後期で大阪外国語大学朝鮮語学科に出願し、合格。大学時代に彼に最も大きな影響を与えたのは、辞書編纂作業と^{キムソウォル}金素月の詩だった。彼が入学した当時、学科の研究室ではすでに朝鮮語辞書の編纂作業が行われていた。辞書編纂に必要な物的・人的支援が十分でなかったため、作業は非常に遅々として進まず、学生たちが参加して多くのことを担当した。大学生である泉もその一人だった。深刻な学園紛争で大学が1年間封鎖された1969年には、大阪教育会館に場所を移し、毎日出勤するようにして辞典作業を手伝った。予算も人員も不足したまま長い時間が費やされた『朝鮮語大辞典』（大阪外国語大学朝鮮語研究室編、角川書店）は、彼が卒業してからずいぶん経った1986年に2巻本で世に出た。

大学1年生の時、^{キムソウォル}金素月と出会った。韓国人客員教授である^{キムサヨブ}金思燁教授から韓国の詩と文学史を学び、金素月の詩を初めて読んだ。「ツツジの花」、「あなたの歌」に感動した。金素月の詩を知っただけでも、韓国語を専攻した意味があると思った。「今も金素月をと

でも愛しています。いつか金素月の翻訳詩集を出版できたらという思いもあります。」年
老いた井田泉はこう付け加えた。彼のホームページには「山有花」、「遠い後の日」、「お母
さん、お姉さん」など、自ら日本語に訳した詩 9 編が紹介されている。

3. 司祭の道、韓国キリスト教研究と戦争責任宣言

井田泉は「母胎からの信者」(ボーン・クリスチャン)である。生後 3 ヶ月で日本キリ
スト教団で洗礼を受け、大学 1 年生の時に聖公会に移り、堅信を受けた。常に確信に満ち
た信仰者だったわけではない。大学時代に信仰に懐疑を抱いた。どうすれば確信を持てる
のか、根本的にどう生きるべきかについて深く悩んだ。朝鮮語学科の学生だったので、
「韓国」に関するテーマで卒業論文を書かなければならなかった。彼が選んだテーマは
「韓国キリスト教の歴史」だった。「簡単な表面的な内容」を記述したものだったが、こ
の論文を書いた後、彼は韓国キリスト教の歴史についてもっと勉強しなければならないと
思い、同志社大学大学院神学研究科に進学し、韓国の初期キリスト教史を研究した。そし
て聖公会神学院に入り、1979 年に司祭按手を受け、以後 40 年間、聖職者生活を続けてき
た。

少年泉が抱いていた韓国、韓国文化、韓国語、そして韓国の人々への関心は、さらに韓
国の歴史、日本の歴史へと幅を広げ、深みを増していった。こうした中で彼は司祭の道へ
と導かれたのである。1982 年立教大学文学部キリスト教学科助教として 3 年間在職し、
「再び韓国のキリスト教を研究する道が開かれた。」その時期にまとめられたのが「安重
根とキリスト教」である。韓国で独立運動家、義士として記憶する安重根を信仰者として
見つめた研究だった。裁判の判決文をはじめ、数千ページに及ぶ日本語の検察記録を熟読
した。義挙直後に安重根が警察に逮捕され、取調べを受け、裁判を受け、死刑が執行され
るすべての過程を資料で確認しながら、彼が真の信仰者であったことを確信した。

「安重根を尊敬するようになりました。愛し、支持するようになりました。」「安重根
とキリスト教」の研究を終え、井田司祭の立教大学最後の時代も幕を閉じた。

その後、聖公会神学院の専任教員として着任し、15 年間在職した。在職期間中、日本
と韓国のキリスト教史資料を整理して本に編纂する作業を担当した。彼が編集責任者だっ

た。日帝強占期植民地時代の朝鮮の資料を詳しく読みながら、その時代の朝鮮人が経験した苦しみと悩みをともに感じた。特に日帝末期の神社参拝に関する資料を読んで「胸が痛かった」「そのような痛みの責任は日本側にある」と思ったからだ。膨大な植民地朝鮮の資料を検討し、当時の日本教会がどのような役割を果たしたのか、具体的にどのような礼拝を行い、どのような教会制度があったのかを集中的に調査した。調査の結果、ほとんどの日本のキリスト教教団と同様に、当時の日本聖公会も日本の戦争と植民地支配に協力したことを確認した。「神様の前に悔い改めなければならぬと切実に感じました。」幸いなことに井田司祭と同じ考えを持つ日本人司祭・信徒が大勢いた。彼らを中心に、日本の戦争責任と植民地支配について、日本聖公会が「罪」を悔い改め、公式に謝罪しなければならないという共感帯が生まれた。

日本社会で言う「戦争」とは「15年戦争」、つまり満州事変(1931)から第2次世界大戦終戦(1945)に至る時期を指す。日本が満州事変を起こし、満州国(1932)を樹立し、本格的に大陸侵略の足場を整え、日中戦争(1937)、太平洋戦争(1941)へと拡大していった時期だった。日本の宗教教団が「謝罪」し「告白」する「戦争責任」とは、日本の軍国主義化過程と日本が起こした侵略戦争、植民地支配に対して黙認し協力した責任、そして敗戦後50年に及ぶ長い間、戦争期間の不合理な制度をそのまま維持し、戦争被害に対する補償と和解に積極的に取り組まなかったことをいう。日本聖公会教団が戦争責任宣言を出すまで、井田司祭は「志を同じくする人々とともに、司祭として、神学校教授として、また歴史研究者としてできる限りの努力をした。」³ 長い期間、志を同じくする人々の努力が積み重ねられた結果、1995年、日本聖公会は、困難を抱えつつも宣教協議会を開催し、初めて戦争責任について告白、懺悔し、1996年の定期総会で「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議した。

「宣言文」に込められた教団の「罪」の内容を正確に調査し、明らかにする過程で、井田司祭が主導した資料集編纂作業が重要な寄与をした。その頃を振り返って彼は言った。

「(もし日本聖公会が)悔い改めることができなければ本当の教会ではないと考え、ここを辞めようと思ったんです。幸い(教団が)悔い改めの宣言をしたので、今に至るまでこ

³ 司祭ヨハネ井田 泉「日韓聖公会歴史断章——詩人・尹東柱を中心に」、第4回日韓聖公会神学会, 2010.2.26

の（聖公会司祭の）仕事を続けています」。冗談のように話す彼の言葉に思わず笑みがこぼれるが、決して冗談で済ませることのできない断固たるものが感じられた。井田司祭個人の人生と日本聖公会の歴史の両方にとって重要な意味を持つ『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』（新教出版社）は1995年に出版され、さらに『日韓キリスト教関係史資料Ⅲ』（同社）は13年の作業を経て2020年11月に出版された。2巻の出版過程には井田司祭が編集責任者として関わった。

4. 尹東柱、彼への愛、彼への責任

井田司祭と詩人尹東柱との縁は1986年に始まった。大学で朝鮮語を専攻したが、金素月の記憶が一番大きかっただけで、その時まで尹東柱については全く知らなかった。1984年に出版された日本語訳詩集『空と風と星と詩——尹東柱全詩集』（伊吹郷訳、影書房）を1986年6月に購入し、同じ月にソウルに行く機会があった時、光化門の大きな書店に立ち寄り、尹東柱の韓国語原文詩集を買って読んだ。「それが始まりでした。」

当時、井田司祭は立教大学で安重根の裁判記録を丹念に読み、彼の信仰と人間性に目覚め、韓国と日本の歴史に深く没頭していた時期だった。その後、聖公会神学院教員時代、約6年にわたって『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』を編集する過程で、「尹東柱をもっと理解し、考えるようになった。複雑に絡み合った韓国と日本の歴史、そして尹東柱と日本の関係、彼の人生、彼の詩をより広い文脈の中で探究し、それに近づくことになった。」

「尹東柱の詩には、波風の中に静けさがあります。波もあり、風もあり、その中にも清らかな精神があります。」

苦悩し、苦痛を味わい、困難な時代を生きた彼の詩から、純粹で清らかな心の世界を感じた。尹東柱の故郷の友人である文益煥牧師が書いた「東柱兄の追憶」を読んで、生前の彼がどんな人だったかを具体的に思い浮かべることができた。文益煥牧師は「彼（尹東柱）の追憶を書くことで私の人生は清められる」と言い、尹東柱について次のような「追憶」を残した。

彼の前ではすべての対立は解消された。彼の笑顔から漂う暖かさに溶けない氷はなかった。彼にはみんなが骨肉の兄弟だった。私は断言できる。彼は福岡刑務所で最後の息をひきとりながら、日本人のことを考えて涙を流しただろう、と。彼は人間性の深さを掘り下げ、その秘密を知ることができたので、誰をも憎むことができなかつただろう。

—文益煥「東柱兄の追憶」, 1967.

日本と日本人を憎まなかつた彼が、若くして日本で最期を迎えたことは痛恨だ。「毎年2月になり、尹東柱が獄死した日が近づくと、尹東柱から来る“風”を感じます。悲劇的ですが、尹東柱の呼吸を私の心の中に感じます。」彼の表現を借りれば、愛だ。その日の彼との対話を通して、韓国、韓国語、韓国人に対する深い愛の心を感じたけれども、何よりも尹東柱への愛が一番大きくて深いことを感じた。そのように愛する人が自分の国で死んでいったという事実に、井田司祭はとても申し訳なく思い心が痛む。

尹東柱が日本に滞在した期間は短かつた。1942年3月頃から1945年2月まで約3年だった。1943年7月以降はずっと拘留状態だったから、学生として過ごした時間は約1年4ヶ月という短い時間である。東京の立教大学で1学期、その後京都に移り同志社大学で2学期を過ごした。1941年秋から立教大学のキャンパスには軍服を着た兵士たちが配属された。彼が入学した1942年4月中旬には「学校断髪令」が施行され、兵士のように髪を短く切らなければならなかつた。4月18日には米軍が日本本土を初めて空襲し、東京を含む6つの主要都市をB25機が爆撃した。立教時代の尹東柱の行方を詳細に調査した楊原泰子氏によると、この時期、尹東柱は学生に強制された軍事教練服を着ず、軍事教練参加に拒否感を抱き、当時文学部宗教学科教授でチャプレンだった聖公会司祭の高松孝治^{たかはる}の自宅を訪ねて相談した。⁴ 井田司祭も2010年の第4回日韓聖公会神学会の講演で、二人の出会いを紹介した。それによると、軍国主義に反対する思想を持っていた高松教授（司祭）は、当局から激しい圧迫を受け、やがて病に倒れ、1946年2

⁴ 立教時代の尹東柱については、楊原泰子、李恩貞 訳 「詩人尹東柱——東京時代の下宿と遺された詩」、『尹東柱詩人を記憶して』 タシオル、2015. を参照した。

月に亡くなった。当時、立教大学と聖公会神学院は隣接しており、交流も多かった。立教大学時代、尹東柱は聖公会神学院の授業にも参加し、黒瀬保郎神学院教授が主宰するお茶の会にも参加したと伝えられている。一学期に過ぎない短い時間だったが、空襲が始まった東京の真ん中で戦争を全身で実感しながら、戦争の時間をどのように過ごすべきか、どのように生きるべきかを、立教時代の尹東柱は問いながら模索していた。そしてその問いと模索の過程で、良識ある日本人との意味ある出会いが続いていた。

おぼろに霧が流れる。街が流れてゆく。

あの電車、自動車、すべての車輪はどこへ流されてゆくのだろうか。停泊する何の港もなく、
隣れな多くの人々を載せて、霧の中に閉ざされた街は、

——尹東柱「流れる街」より

1942年5月12日、立教大学に入学してから1ヶ月余り、そして米軍の最初の空襲から約1ヶ月の時間が過ぎた頃、尹東柱が書いた詩「流れる街」の最初の連である。戦争中の都市の風景、最初の空襲が始まった東京の街を捉えた詩である。砲煙に包まれたように霧に包まれた都市、その中で迷子になった人々、どこにたどり着くか予測できない不安な時間、街、人々が「流れる霧」のイメージに込められている。

尹東柱を記憶する日本人の人々は、彼が普通の日本人と同じように、軍国主義の統制と米軍の爆撃の中で戦時中の日本の時間を経験したこと、また戦時中の日本の悪法（治安維持法）によって苦しみ、犠牲になったことで、同じ被害者であるという同質感、悲しみ、申し訳なさが混ざり合った複雑な感情を抱いているようだ。戦争中に親しい人を失って生き残った人々、自分を戦争の犠牲者と考える多くの日本人にとって、自分たちと同じように尹東柱が「戦争の犠牲者」であるという考えは、日本社会に大衆的に彼を知らせる契機となった。尹東柱を「同じ被害者」として記憶しようとする日本人の態度は、彼らが異邦人の詩人に近づくための一つの道となりつつも、一方で戦後日本社会の「被害者意識」が持つ限界の中で彼を受け入れる危険を内包している。戦後の日本社会における「被害者意識」は、侵略戦争の記憶を否定し忘却させるメカニズムとしてその限界がしばしば指摘されてきた。戦後日本の平和主義は、帝国主義の侵略と過去の時間を括弧の中に入れたまま、

世界唯一の被爆国であることを強調し、戦犯を除く日本人全員が戦争の被害者であり、すべての戦争に反対するという反核・反戦意識を強調してきた。このような雰囲気の中で、尹東柱の物語も「気の毒な戦争被害者」の物語として受容された側面がある。

井田司祭は、尹東柱の「被害者性」を繰り返したり、安易な「平和」と「和解」を語る前に、まず力をこめて「責任」を語る。彼がインタビュー中、繰り返し強調していた言葉だが、尹東柱に関する日本社会の「責任」を語る時、この言葉はより頻繁に繰り返され、調子も高くなった。

「尹東柱の死について、日本、日本人、日本政府に責任があります。尹東柱はただ死んだのではなくありません。殺されたのと同じです。日本が謝罪し、責任を負わなければなりません。」

断固たる厳しい口調だった。尹東柱の死に関する疑惑、彼を取り巻く数々の言葉が飛び交う中、「同じ被害者」ではなく「加害者」としての日本の責任を厳しく述べた言葉だった。キーボードを叩いて彼の言葉を書き写しながら、ふと彼の顔を見た。たった一言だったが、日本人としてはなかなか言えない言葉だった。韓国人にとって尹東柱は「独立運動をして敵の刑務所で獄死した」人物として長く記憶され、その死の直接的な原因として戦争中の「生体実験」の対象として犠牲になった可能性が提起されたこともある。⁵ しかし、その可能性は現在まで推定と疑惑として残っているだけで、彼の死に関する直接的な死因と証拠については明らかにされたことはない。⁶ 井田司祭は「直接の死因」に集中する代わりに、尹東柱を死に至らせた「過程」と「原因」を語り、「責任」を問う。

尹東柱が日本で過ごした約3年、彼の生涯最後の時間であったこの時期の半分以上を、

⁵ 尹東柱の「生体実験死亡説」の根拠となった最初の証言は、彼の叔父である尹永春の「故 尹東柱について」(『文藝』1952.5)である。尹永春は1945年2月末頃、福岡刑務所で尹東柱の死体を確認し、いとこの宋夢奎に最後に会ったとき「注射を受けるといので受けたらこんな姿になって、東柱もこの姿に……」という彼の言葉を、この文に記録している。

⁶ 多胡吉郎は『生命の詩人・尹東柱——『空と風と星と詩』誕生の秘蹟』(影書房, 2017)で、緻密な取材と資料調査をとおして尹東柱の「生体実験死亡説」のディテールにおける誤謬や不確実性を指摘し、「明確な結論が出ない問題」と暫定的な結論を下す。

彼は警察署、拘留所、刑務所で拘留状態で過ごした。日本の特別高等警察による逮捕後、拘留期間中の「強制労働」と「虐待、拷問」、そして「寒さによる衰弱」が尹東柱を死に追いやったと井田司祭は判断する。⁷ また特高が尹東柱を突然逮捕する根拠となった当時の治安維持法が、彼を死に至らしめた根本原因だと指摘した。

治安維持法は 1925 年に制定された後、1928 年に改正され、さらに 1941 年に 2 次改正された。尹東柱と宋夢奎^{ソンモンギョ}は第 2 次改正の治安維持法第 5 条違反で 1943 年 7 月に逮捕され、1944 年 3 月に懲役 2 年を宣告された。1941 年に第 2 次改正された治安維持法は「国体変革のための結社」ではなく、「その支援や準備」だけでも合法的な処罰を可能にした。実際、裁判判決文に記載された犯行事实は、彼がどのような本を耽読し、どのような「意識」を抱き、どのような「思想」を持ち、「信念」を持ち、「決意」のために「会合」をしたか、というものだった。尹東柱が抱いていた「思想」と「信念」、そして友人との「出会い」だけでも、「国体変革」を「目的」とした重大な犯罪者として処罰できる根拠が、まさに治安維持法だった。

「彼（尹東柱）が自分の民族の言葉で詩を書き、また独立への願いを友人と語り合ったことが重大な犯罪とされたのでした。」

——井田泉、「詩人・尹東柱の命を奪った治安維持法」⁸

「尹東柱の命を奪った治安維持法。」井田司祭は、尹東柱の死に対する日本社会の責任をこの一言で要約する。詩を書き、「清らかな精神」を持った「美しい」青年が、日帝の戦争体制と植民地支配、そしてその体制下の人々を支配し監視するための悪法によって死に至ったことを告発し、抗弁する。井田司祭が力説する「責任」は過去の歴史ではない。戦時体制期の統制と監視の手段であった治安維持法は、包装だけ変えて 21 世紀の日本で今も施行されているからだ。安倍晋三政権は 2017 年 7 月、廃止から 70 余年ぶりに治安維持法を復活させ、いわゆる「共謀罪」を含む「改正組織的犯罪処罰法案」を国会で通過させた。尹東柱に適用されたように、「計画」と「合意」の段階で犯罪とみなし、法的処罰

⁷ 司祭 ヨハネ井田 泉, 同文.

⁸ 井田泉, 「詩人・尹東柱の命を奪った治安維持法」, 『平和実現するキリスト者ネットニュースレター』208号, 2020.7.10.

が可能になったのだ。

「治安維持法によって彼（尹東柱）が逮捕された同じ月。この国の暴走を許してはならないという思いを新たにします。

—— 井田泉、「尹東柱の命を奪った治安維持法」⁹

日本社会が次第に右傾化し、歴史を美化し、戦争と植民地支配を正当化する雰囲気強化される中で、尹東柱に対する日本の謝罪と責任を強調することは、過去に限定されない現在の意味を持つ。過去の日帝の過ちによって無実の青年詩人が命を失ったように、再び「戦争する国」を夢見る日本が無実の一般人の日常を監視し、自由と民権を統制して「もう一人の尹東柱」の死を生む可能性があるという警告の意味で、尹東柱という文化的象徴は重要な意味を持つ。彼の死について日本社会が真摯に「謝罪」し、「責任」を認めるとき、将来繰り返される可能性のある自由と人権の制限、不当な死を防ぐことができ、それが真の「平和」への道だと井田司祭は考える。彼が説教や講演、寄稿、テレビ出演を通じて、尹東柱を広め続ける理由がここにある。「尹東柱一人に出会うだけで考え方が変わり、変化をもたらすことができる」と彼は考える。それだから井田司祭の「尹東柱を知らせる」働きはこれからも続くだろう。

5. 翻訳、愛の方法

インタビューを進めていた井田司祭は突然立ち上がり、隣の部屋に案内した。応接室の隣の小さな部屋には、本でいっぱいの本棚が壁一面にあり、片隅に小さな机が置かれていた。本棚から尹東柱の韓国語詩集、日本語訳詩集、朱基徹牧師の説教集、金麟瑞牧師の説教集などを取り出して見せてくれた彼は、隅の大きなキャビネットの扉を開けた。キャビネットの中には、韓国と日本のキリスト教史関連資料が整理されないままぎっしりと入っていた。「この資料を整理して研究しなければならないのですが、教会の仕事が多くて手がつけられないでいます。」数歩歩んだ彼は、一瞬、満面の笑みを浮かべながら本棚から

⁹ 井田泉, 同文.

古い本を一冊取り出した。『満州朝鮮復刻時刻表』（新潮社）のケースに入った「朝鮮列車時刻表」だった。表紙には昭和 13 年 2 月号、朝鮮総督府鉄道局編纂と書かれていた。昭和 13 年、つまり 1938 年は尹東柱が延喜専門に入学した年である。日本の古本屋で購入したその本を、井田司祭はまるで大切な宝箱を取り出すように慎重に、しかし誇らしげに広げて見せた。「時々この時刻表を取り出し、私一人で想像しています。学校の休みに家に帰る尹東柱はこの列車に乗っただろうか。この列車に乗ったなら今頃は上三峰^{サンサムボン}で汽車を乗り換えて開山屯^{ケサントン}を過ぎているだろうな。午前零時をずっと過ぎてから龍井駅に到着しただろうな。私一人でこう想像してみます。」

彼の話にひとりでのめり込んだ。「休みで帰って来る孫を、部屋の下まで降りて来て握手で迎え」たという（尹一柱^{ユンイルジュ}「また東柱兄さんを語る」）良きお爺さんは、真夜中でも足袋だけで飛び降りて孫を喜び迎えたのだろうか。私もつられて楽しい想像を続けてみた。尹東柱をいとおしむ老司祭の心を深く感じた。

詩の翻訳は、井田司祭が尹東柱への愛を表現する彼なりの方法だ。「伊吹郷先生の尹東柱の最初の翻訳詩集は、開拓者の詩集として非常に重要な意味があると思います。伊吹先生から学んだことはたくさんあります。しかし、翻訳を見ると、私とは違う感覚のものがああります。私は直訳を好む方です。単語の中にはその単語だけの特別な生命があると思っています、可能な限り詩の生命や感じを、私自身が持っている日本語の感覚に沿って翻訳したいと思っています。一人一人持っている感覚がすべて違うからです。」

例えば、「序詩」の冒頭の「死ぬ日まで『ハヌル』を仰ぎ、一点の恥なきことを」の「ハヌル」を、伊吹は「空」と訳したが、井田司祭は「天」と訳した。「空」は自然の物だ。井田司祭は、「序詩」の「ハヌルル ウロロ（天を仰ぎ）」が聖書に出てくる「ハヌルル ウロロ」と同じ文脈の言葉だと考える。尹東柱が聖書に基づいてこの詩を書いたのかどうかははっきり分からない。しかし、その姿や心が「イエス様の姿や心と関係があると思われるので、私は尹東柱の『ハヌル』がイエス様の『ハヌルル ウロロ（天を仰ぎ）』と関係があると考えます。祈りと関係があると思います。」その後の節「モードウン チュゴガヌン ゴスル サランヘヤジ」も井田司祭は直訳を選び、「すべての死んでいくものを愛さなければ」と翻訳した。伊吹郷が「生きとし生けるものをいとおしまねば」と訳し、

多くの議論を巻き起こした節である。同志社大学構内の尹東柱詩碑にもこの伊吹訳が刻まれており、事実上、これが日本では尹東柱翻訳詩の「定本」として受け入れられている。しかし井田司祭は「命あるもの、死んでいくものすべてを愛したい」という意味で、「死んでいくもの」と訳した。

「八福」の翻訳にも、井田司祭の独特の視点が現れている。聖書のマタイによる福音書第5章3節から12節に基づくこの詩は、「悲しむ者は幸いである」を全部で8回繰り返した後、しばらく間を置いて「私たちは永遠に悲しむだろう」という最後の行で終わる。井田司祭が苦心する部分は「チョフィ」という言葉だ。韓国語で「チョフィ」は「ウリ」の謙譲語でもあり、また「前にすでに述べた、あるいは出て来たことのある人々をもう一度指す三人称代名詞」でもある。井田司祭は最初の意味、つまり「私たち」と解釈できる可能性を残している。「悲しむ」には尹東柱自身の「悲しみ」も含まれており、また、この地球上に「悲しむ」人がすべてなくなるまで、彼は「最後までイエスと一緒に悲しむだろう」と考えるからだ。「チョフィ」を「私たち」ではなく「彼ら」と解釈すれば、尹東柱はその中に含まれないため、意味を完全に捉えることができない、と井田司祭は考える。彼の翻訳には現在「私たち（あるいは、彼らは）永遠に悲しむであろう」と書かれている。

これまでに井田司祭が日本語に訳した尹東柱の詩は全部で19編で、彼が「最も好きな詩の一つ」と言う「自画像」をはじめ、「序詩」、「星を数える夜」、「十字架」、「八福」、「もう一つの故郷」、そして「風が吹いて」、「弟の自画像」などが含まれる。金素月の詩と同様に、いつか翻訳作業を締めくくって、もう一つの日本語版尹東柱翻訳詩集を出版できることを願っている。

6. 「連累」の生

インタビューは約束された時間を大幅に超え、5時過ぎに終わった。もともと約束した時間は1時から4時までだったが、尹東柱の過去と現在、そして彼を「愛」する司祭さんの過去と現在を行き来しながら「尹東柱物語」に没頭しているうちに、司祭さんも私もミンさんも時間を忘れていた。予定された時間をずいぶん過ぎたが、まだ話したいことがたくさん残っているような気がした。その日は教会の重要な行事として音楽会が予定され

ていたので、司祭さんはインタビューを急いで終えた後、すぐに礼拝堂に向かった。

インタビューを終えて教会の外に出てから、彼と写真を1枚も撮れなかったことに気づいた。残念な気持ちを抱えながら教会の境内を出ると、鹿が1匹、私を迎えてくれた。奈良は鹿の放牧が盛んな土地として知られている。よく聞いた話だが、まさか公園でもない道端で鹿に会えるとは思わなかった。嬉しい気持ちで鹿と記念写真を撮った。司祭さんの代わりに鹿だなんて！ その日の写真には、残念さと嬉しさ、そして思いもよらない心の風景がそのまま残っている。

ホテルに戻ると夕方になっていた。長い一日だった。ようやく緊張が解けた。インタビューの記録を見ながら、その日に井田司祭からもらったDVDを再生してみた。2019年2月10日にNHKのEテレで放映された「こころの時代—詩人・尹東柱を読み継ぐ人びと」の映像だった。画面の中で井田司祭が早朝、幼稚園の子どもたちを迎えるために教会の正門の前に出ていた。

私とスミンさんに教会の境内を紹介してくれたその日も、子どもたちはたびたび彼に駆け寄り、抱かれていた。そのたびに彼は子どもたちと目を合わせ、温かく抱いてやっていた。画面が変わり、別の場面で彼が尹東柱の詩を韓国語で朗読した。尹東柱の詩を読む彼の声は正確でありながら慎重で繊細だった。一単語一単語、いや、一文字、一文字を、彼がどれだけ心を込めて注意深く読んでいるかを感じることができた。目を閉じて声に耳を傾けた。一人の異邦人の詩人、異邦の言語に対する無限の愛情が、私にも伝わってくるようだった。

インタビューを通して彼が強調していた「責任」について考えてみた。1950年生まれの井田司祭をはじめとする大多数の戦後世代に、戦争中に起きたこと、自分が生まれる前に起きた出来事に対して、果たしてどれだけの「責任」を問えるだろうか。韓国人たちは日帝の植民地支配、強制徴用、慰安婦問題について日本政府の公式謝罪と責任ある補償を要求しているが、戦争を経験していない日本の戦後世代の各個人が、歴史を直視し、責任を実感することは難しいことかもしれない。歴史学者テッサ・モーリス＝スズキが語った「連累 (implication)」という概念は、井田司祭が強調した「責任」を理解するのに役立つ。彼女によれば、私たちは直接経験していない過去と非常に広い意味で「関わって (連

累して)」いる。例えば、現在私たちに馴染みのある制度や概念などは、過去の行為によって形成された歴史的産物であるにもかかわらず、私たちはその制度や概念などがどのように形成されたかをほとんど意識せずに生きていることが多い。私たちが生まれる前に起こったこと、あるいは直接行為しなかった過去の事柄について、私たちに直接的な責任はないかもしれないが、過去の行為のおかげで現在の私たちが存在しているという意味で、「連累」自体は避けることができない。

もし現在の生活が過去の暴力行為によって構築された制度や構造の上に維持されているとすれば、それでいて私たちが現在の生活に覆いかぶさった過去の影を払拭することができないとすれば、未来の生はどうなるだろうか。井田司祭はこの問いを避けてはいない。彼の文章やインタビューを通して私が受けた印象は、彼が自分の人生に「関わる（連累）」ことになった問題や人々を決して避けず、自分の問題として向き合っているということだった。「連累」とは、心理学的な状態であると同時に、継続する不義の構造に対抗する社会的で政治的な参与である」（テッサ・モーリス・スズキ『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』）。幼い頃、隣家の朝鮮人家族に初めて感じたかすかな罪意識、「私たちが何か悪いことをしたのだ」という思いを、井田司祭は簡単に無視することなく、粘り強く問いかけ、探求し、「社会的で政治的な参与」という形で導き出した。

韓国キリスト教史研究、日韓キリスト教関係史研究、聖公会教団の戦争責任宣言、そして尹東柱の詩の翻訳とそれに関する講演・説教・寄稿などが、彼が生涯をとおして続けてきた様々な「参与」活動にあたる。自分が所属する社会がもう少し良い社会となることを願う実践的行動である。尹東柱を死に至らしめた過去の歴史的暴力が依然として現在に残存していることを直視する彼の粘り強い情熱と洞察力に、おのずと頭を下げざるを得ない。彼だけでなく、私自身もまた過去と現在の時間に「連累」している。「連累」関係を直視しているか。「連累」を喜んで受け入れているか。一つの社会の構成員として、連累者として、私もまた自分が生きて行く社会がもう少し良い社会となるように努力しているか。すぐには答えることができなかった。井田司祭との出会いは、間違いなく長い余韻を残すだろうという予感がした。その夜、私は夜遅くまで考えが尾を引いてなかなか眠れなかった。夏を先取りした長い夜だった。

井田泉司祭は 2020 年 3 月に定年退職し、奈良を離れ、今は滋賀県野洲に住んでいる。今も主日には様々な教会で聖餐式の司式や説教を行い、司祭職を果たしている。最近では 2023 年 1 月 22 日と 29 日に、京都の聖アグネス教会と聖三一教会で、それぞれ尹東柱の「十字架」と「八福」を中心に説教した。井田司祭にインタビューして文章にすることは、私の境界的な枠組みを超えて他者の生に近づく時間であり、「私」を省察する時間だった。故郷満州と故国朝鮮、帝国日本の境界を行き来した尹東柱が日本で新しい人々と交流したのと同じように、私も井田司祭と国境を越えた対話を続け、尹東柱が結びつける過去と現在の時間を、深く長い韓国と日本の関係を、その中で生きていった人びとを考えてみることができた。尹東柱を読み、彼を媒介として他者と出会うことは、これからも続くだろう。井田泉司祭と分かち合った尹東柱の物語は、ここで一旦結びとする。

キム・シンジョン（金信貞）

韓国放送通信大学国文科教授。

論文「満州物語と尹東柱の記憶」、「二重言語／多言語状況と朝鮮語詩作の問題——尹東柱の詩を中心に」等。

（訳・井田 泉）

『白潮』第 12 号（2023 春）、露雀洪思容文学館、2023.3.20